

原始教団における〈ἀγιος 聖徒〉概念の成立

雨 具 行 磨

1 提 題

原始キリスト教団の成立過程は、エルサレム原始教団の非中心化をめざす神学運動であった。これは、積極的には、エルサレム原始教団における伝承を、非エルサレム諸教会が再解釈をする運動であったといえる。この運動の担い手は、教団を〈ἀγιος 聖徒〉¹⁾の共同体として自覚することに、伝承再解釈の規準をえた。

2 はじめに

伝承再解釈は、伝承に対する一定の態度決定をなしうる積極的な、解釈規準を、伝承のなかにみいだすことを要請する。それは伝承に対して直接無媒介に依存する伝承の固定化と、自己の閉鎖化ではなく、又伝承そのものの継承を拒否して無根拠となり共同体をみずからの自覚のうちに喪失することでもなく、伝承に対して批判的に、否定媒介することによって改革的、歴史形成的な態度決定をつくりだすことである。

この伝承再解釈を追跡するためには、一定の概念をきめ、それが、どのように理解されたか、又どのように理解されなおしてゆくかを、追うことである。そこでは、理解の方法をめぐる解釈学的な自覚が必要である。パウロの時代、64/66年迄²⁾において、すでにエルサレム教団とアンチオキアを中心とする教団との間に使徒会議に示される見解の相違があった。しかし、基本的にはエルサレム教団の權威は認められたが、70年エルサレムの破壊と共にエルサレム¹⁾教団のユダヤ人キリスト者は、小アジアへと移住、³⁾小アジア諸教団は、ここに新しい課題を自覚した。すなわち、小アジア諸教団におけるエルサレム教団の權威の問題、エルサレム教団に対する態度決定の課題である。しかも、彼らは、グノーシスという著しく宗教・思想活動の土壌のなかで、共同体形成をしていた。ここにエペソ書は書きしるされたのである。パウロ書翰につづくおよそ紀元80~100年小アジアにおいてである。⁴⁾

パウロ書翰を踏査すると、〈人間〉を示す〈*ἅγιος*〉とその近親語は、その書翰 (I Thess, Gal.) にはない。しかし、パウロが第1回エペソ滞在中と、それ以後に作成された書翰には〈*ἐκκλησία*〉にかわるものとしての〈*ἅγιος*〉をみることができる。⁵⁾ この諸書翰に続く、いわゆる第2パウロ書翰としてのエペソ書には、その書翰全体にわたって〈*ἅγιος*〉はしばしばみだされるばかりではなく、その中心的概念 *σῶμα τοῦ Χριστοῦ*⁶⁾ を支える内容的用語としてみることができる。

すなわち、

2:19 そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり *σομπούεται τῶν ἁγίων*

2:21 このキリスにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に *εἰς ναὸν ἁγίων* 成長し、

3:5 この奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たち *τοὺς ἁγίους ἀποστόλους* と予言者たちとは啓示され、

9:8 すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい *τῷ ἐλαχιστατέρῳ πάντων ἁγίων*

3:18 すべての聖徒と共に、*συν πᾶσιν τοῖς ἁγίοις*

4:12 それは、聖徒たちを *τῶν ἁγίων* ととのえて、

5:13 聖徒たちにふさわしく *καθὼς πρέπει ἁγίοις*

6:18 b すべての聖徒のために *περὶ πάντων τῶν ἁγίων*

パウロ書翰に続いて、エペソ書4:11までに至る〈*ἅγιος*〉は明瞭にエルサレム教団を示している。それゆえ、ここまでの〈*ἅγιος*〉の概念は、パウロにおいてと同じであるが、エペソ4:11以後はどのような概念であろうか。

3 積 義

〈*ἅγιος*〉

すでに、旧約聖書 J 質料において (Ex. 3:5)、更に民数記 20:13 神の存在様式としての〈聖なる〉もの、予言書における〈聖なる〉もの〈超越性・永遠性〉 Is. 40:27, 27 〈栄光〉 Is. 6 となり、〈聖なるもの qdsh〉は、LXX において〈*ἅγιος*〉として把握されている。これが祭儀に集中して〈神 (主) に選ばれる民〉〈聖なる民〉 (Dt. 7:6, 14:2) として、イスラエルの民を示す。⁷⁾

かくて旧約聖書においては、〈qdsh〉→〈*ἅγιος*〉は、神それ自身の永遠・超

越・栄光が、祭儀規定展開に基づいて、イスラエルの民と把握されて、人間化・世界化する。⁹⁾

パウロ書翰では、前述したように、〈ἀγιος〉は〈エルサレムの民〉にとどまる。⁹⁾ 人間化・世界化は、個別化における具体化とみてよい。エペソ書 4: 11 迄そうである。

エペソ書 4: 11 において、〈キリスト〉の〈χάρις〉(4: 7)を根拠・基準(κατα)¹⁰⁾において、〈ある者〉を〈使徒 ἀποστόλος〉〈予言者 προφήτης〉〈伝道者 εὐαγγελιστής〉〈牧師・教師 ποιμηνής・διδασκάλος〉として権威づける。しかも、この〈権威〉づけは、各個教団によってではなく、〈神〉もしくは〈キリスト〉が主語となる。¹¹⁾ これらのそれぞれの〈機能〉とその〈秩序づけ〉についての関心をここでは示していない。むしろ、それらを統括して〈ἀγιος〉とし、〈πρὸς τὸν καταρτισμὸν τῶν ἁγίων〉とその方向を示している。

〈πρὸς τὸν καταρτισμὸν τῶν ἁγίων〉

〈προς+acc.〉は、〈到達すべき目標へ向ける〉ことであり、¹²⁾ 〈καταρτισμος〉は〈καταρτισις 本来を回復すること、ただし II Kor 13: 9〉と同じであり LXX の Pss 8: 2 に〈家庭をととのえる——敵にそなえてとりでを設ける〉と用いられている。ここから〈οὐκοδομή〉を予想させる。この動詞形〈καταρτίξω〉Gal 6: 1 では〈ただす〉。Bauer は、εἰς をともなって、(εἰς ἔργον διακονίας) um d. Heiligen z. Dienstleistung auszurüsten と訳している¹³⁾ことは妥当である。すなわち、全体像におけるそれぞれの妥当な配置の確立・確定をめざすといえよう。¹⁴⁾

〈εἰς ἔργον διακονίας〉

〈ἔργα διακονίας〉は、パウロにおいての、人間が、神の前に〈δικαιοθυνη〉を獲得する自己確立・自己完成としての旧約的・ユダヤ教的(Gal 2: 16, 3: 10 Rm. 3: 20)〈ἔργα νομοῦ〉¹⁵⁾との対比を思うことができよう。ここでは、〈やみのわざ〉(5: 8, 9, 14, 6: 12-18)に対立するよりむしろ〈πίστις〉と〈χάρις〉を拒否する〈わざ〉(2: 9)と称する。in loco justificationis 義とされる場における〈ἔργα〉ではなく、キリストの missio にもとづく、そのよい〈奉仕者〉の〈わざ〉に近い(I Tim 4: 6)。¹⁶⁾しかし、注目すべきことは、旧約聖書における(LXX)〈διακονία〉はWiss. 10: 4, Est. 1: 10, 2: 2, 6: 3, 5 IV Macc 9: 7 においては、いわゆる世俗的な用例を示すものであり、〈宣教〉を含む〈使徒〉らの業は、〈leitourgós〉によって示される。〈leitourgós〉は、LXX においてほとんど例外なしに、祭司的・祭

儀的行為を指し示している。パウロは、これを受け継ぎ〈神の仕え人〉(Rm 13:6)に示されるように、福音宣教の業を〈 λειτουργός 〉としている。同時に、彼にあって〈 διακονία 〉は、教団全体に対する世俗の配慮を示す内容で、¹⁷⁾ いわゆる祭司的・祭儀的行為を示すものではない。むしろ、ヘレニズムにあっては、〈 διακονία 〉は〈 給仕をする 〉という非宗教的・日常的概念であり、更に、卑賤な行動・態度と表わす。エペソ書は、明瞭に、この用語を、〈 キリストに委託された χάρις の担い手達に、¹⁸⁾ すなわち〈 使徒 〉〈 予言者 〉〈 云導者 〉〈 牧師・教師 〉の 〈 ἔργον 〉 sing. ! を示すに、〈 λειτουργός 〉ではなく〈 διακονία 〉を選びとったことは〈 教会は、それによって、自己を神と仲間の人間とに用立てる態度をあらわそうとしたのであって、権利と権限とを含むひとつの地位をあらわそうとしたのではない ¹⁹⁾ 〉のである。〈 διακονία 〉において宣教内容は世俗化し、非終末論化する。かくて、明瞭に、非祭司化・非祭儀化を自覚しているなかでは、もはや 4:11 では〈 ἀγιος 〉をユダヤ教的な背景を強く自覚させざるをえない〈 qdsh 〉の訳として〈 聖徒 〉とし再ユダヤ教化する危険をさけて〈 神の民 〉と訳することは適切であるといわねばならない (NEB)。それゆえ、4:11 迄は、〈 ἀγιος 〉はパウロに基づいて〈 エルサレムのひとびと 〉を示す以上、〈 聖徒 〉でよかるう。しかし、エペソ書におけるその概念展開からして、4:12 及、5:13 において、は同じ〈 ἀγιος 〉でも、そのままで、ユダヤ教的な自覚すなわちエルサレムの人々を直接的に予想させざるをえない用語ではないものをもって、訳さねばならない。

〈 εἰς οἰκοδομὴν τοῦ σώματος τοῦ Χριστοῦ 〉

〈 τοῦ σώματος τοῦ Χριστοῦ 〉この用語は、ストア的背景、グノーシス的背景、旧約聖書的背景——その共同体的人格概念、キリスト教的背景——聖餐の概念、ラビ的背景——アダムのからだの思想など、パウロにおけるその起源を導き出すことができよう。²⁰⁾ エペソ書においては、1:23、5:23 にみられるように Χριστός—ἐκκλησία と κεφαλή (v. 15)——σῶμα とを対比させて、グノーシス的概念操作をしている。²¹⁾ ここで〈 σῶμα 〉は〈 ἐκκλησία 〉を示す。²²⁾ これを、エペソ書は、〈 すべての支配・権威・権力・権勢 〉の上にたつ〈 κεφαλή 〉としての〈 Χριστός 〉の〈 かくされた奥義 〉(1:9、3:4、5、9、5:32) 主権の確立を、その全体性において (σῶμα) 啓示されたとする。この〈 μυστήριον 〉が、〈 密儀 〉にあずかるかたちでの個人的な洞見において秘められたままになるのではなく、その全体的共同体において、〈 γνωρίζω 知らせる 〉ことにある。(1:9、3:3、5、10、6:19、21)。この〈 γνωρίζω 〉は

〈育成 αἰξω〉と〈οἰκοδομὴ 形成〉と結びつく。かくて、〈οἰκοδομή〉は、個人的な領域での〈敬虔いわゆる建徳 Erbauung ではなく、キリストのからだ〉の確立を示している。²⁵³ すなわち、〈διακονία——ministerium〉としての〈plantaio ecclesiae〉は、〈主体の共同体的形成・共同体の主体的形成〉²⁴⁹ともいわれよう。

〈μέχρι καταστήσωμεν οἱ πάντες εἰς τὴν ἐνότητα τῆς πίστεως καὶ ἐπιγνώσεως τοῦ ὕου τοῦ θεοῦ〉

〈κωνστήσωμον ← κωντανω εἰς. の aor. subj.〉到達の方向を示している。原始教団においては、これが、神によって決定され、規定された、共同体全体の営みの方向を示す。²⁵⁴ この方向は、〈ἐνότητην〉である。これは、キリストの出来事において、〈ἐφάπαξ〉完成したのである。それゆえ、この〈ἐνότητην〉は、終末論的な事柄に属する。²⁶¹

〈τοῦ υἱοῦ τοῦ θεοῦ〉は、〈人間〉を示す場合もあるが、ここでは 1:5 とは全く異なる。又〈人間〉は〈神に愛されている子〉(5:1)〈光の子〉(5:8)と把握されている。又〈πιστεῦειν〉と関わり、その acc. である。従ってこれは acc. gen. である。

〈εἰς ἄνδρα τέλειον〉

〈τέλειος〉は、マнда教文書では、天にある住居に向って旅をし、本来の自己を回復する者、あるいは、〈潔められて〉²⁷¹〈γκώσις 知識〉をもち至上の幸福をえた者²⁸¹をいう。ここでは〈τέλειος〉は天的存在として理解される。〈ἄνδρ〉は、ひとりの人間を示すのではなく、隠喩としてある実体を示す。²⁹¹そして、〈ἄνδρ τέλειος〉は〈νήπιος (v. 14)〉との対比で用いられている。³⁰¹〈νήπιος〉はラビ伝承における〈父〉との家族関係を示す〈παιδεία〉(6:1, 4)とは異なり、社会的公的存在のありかたとしての〈未成人〉を意味する。³¹¹それゆえ〈ἄνδρ τέλειος〉は〈成人〉を意味する。しかも〈ἄνδρ τέλειος〉は sing. でありながら〈οἱ πάντες ← ἄγεων (v. 16) pl.〉を受けている。それゆえ、〈ἄνδρ τέλειος〉は個人としての人間実存のありかたではなく、ある一定の共同体的実体としての意味〈成熟〉となる。³²¹グノーシス的宇宙論を非神話化し、地上化し、しかも実存化ではなく、実存論化し、共同体化しているといえよう。又、ここでは道徳的な性格にふれることはない。これは再び、くりかえされる。すなわち、

〈εἰς μέτρον ἡλικίας τοῦ πληρώματος τοῦ Χριστοῦ〉

〈ἡλικίας〉は、〈思慮分別あり、その行動判断において成熟した者〉³³¹であ

り、その〈μέτρος〉すなわち〈程度〉・〈段階〉である。

〈πλήρωμα τοῦ Χριστοῦ〉は、明瞭に、ユダヤ教的用語ではなく、後期グノーシスの〈神性〉概念を用いている。³⁴⁾ そこでは〈Χριστός〉は〈πληρώμα〉に復帰して〈σοφία〉となり、全体は靈魂の〈τελειος〉となる。³⁵⁾ しかし、ここでは、先にみられるグノーシスの宇宙完成の秘儀ではなく、コロサイ書に近い。すなわち、〈πληρώμα〉の〈κατοικεῖν〉すなわち、現在性の徹底を示している。〈キリストこそ、神の主権の確立が、かたちをもって σωματικῶς 現存し、あなたがたは、キリストにあって、これに充実している〉(1:9)³⁶⁾ かくて、〈to the measure of the age of maturity of Christ〉³⁷⁾ あるいは〈measured by nothing less than the full stature of Christ〉(NEB) すなわち〈キリストに示される、充実した成熟さの段階〉となろう。これが〈σῶμα Χριστοῦ〉の全体性 totus christus 共同体の人格性において確立されることである。

4 ま と め

かくて、〈ἀγιος〉は〈キリストの恵み〉を根拠として、〈自己を神と仲間の人間とに用立てる〉こと、そこに〈ἐκκλησία〉は形成する者達として全体に対する配置の確立をめざす。彼らは、共同体全体性において、キリストの充実せる成熟性の段階に方向づけられるのである。しかも、その成熟性は、〈キリストのからだ〉からきりはなされることなく、むしろ〈神の子であること υιοθεσια〉³⁸⁾ (1:5) を確立するのである。それゆえ、〈ἀγιος〉の成熟性は、地上化・世界化するなかで遂行されるが、それは、〈σῶματα τοῦ Χριστοῦ〉の形成に徹底すること、〈信仰と知識〉の一致に達することなのである。³⁹⁾

〈ἀγιος〉は、いまや、〈ἔργον διακονίας〉において世俗化 Säkularisierung し、〈σῶμα Χριστοῦ〉において全体化するのである。これは、5:3 において再び確認されるのである。小アジア諸教団の、〈あなたがたが〉〈ἀγιος — the people of God (NEB)〉なのであると。ここではもはや、〈ἀγιος〉は〈聖徒〉と訳されるより、世界における成熟した、〈神につける民〉と訳されるべきであろう。彼らは、克服さるべき〈υἱπίος〉(v. 14) ではなく〈τέκνα φωτός 光の子〉(5:8) なのである。

註

- 1) この段階では〈ἀγιος〉を〈聖徒〉聖書協会訳をそのまましておく。New English Bible 1960 (NEB) では God's people, people of God となっている。しかも〈名詞〉

原始教団における〈*ἄγιος* 聖徒〉概念の成立

- として *ἄγιος* はすべて、である。
- 2) 新聖書大辞典 p. 1059 (竹森満佐一)
Evangelisches Kirchen Lexikon III S. 93 (Chr. Maurer) Die Religion in Geschichte und Gegenwart³ V S. 173 (H. Bornkamm). これらは、エペソ書を真正のパウロ書翰ではないことを前提としている。それゆえエペソ書成立は、それ以後であり、新聖書大辞典では90年前後とみる402頁(真山光弥)
 - 3) 秀村欣二: ユダヤ人キリスト者のペラ移住の伝承とイエルサレム教会, オリエンツ 10号 3/4 分冊, 1968, 17-30頁。
 - 4) 新聖書大辞典 208頁, 荒井献: 原始キリスト教とグノーシス主義 1971, 79頁。
 - 5) *ἐκκλησία* にかわって *ἄγιος* が用いられはじめたのは、エペソ滞在を契機にしていることは、パウロ書翰全体を通じて更に検討されねばならない。
 - 6) エペソ書における、神学思想が、神の世界支配と、その主権確立者としてのキリスト、ならびにキリストのからだとしての *ἐκκλησία* この *ἐκκλησία* への根拠づけと派遣に中心と、その展開をもっている。山谷省吾: 新約聖書解題 1958, 94頁。
 - 7) Pss 34: 10, 50: 5, 85: 8 (9), 97: 10 passim Wiss 2: 8.
 - 8) M. Noth: Die Heiligen des Höchsten, in Gesammelte Studien zum AT 1957, S. 276 f.
 - 9) 松本治三郎: ローマ人への手紙 1966, 513頁。〈エルサレムにいる聖徒のうち貧しい人々を授けよう〉 Rm 12: 13, 15, 26.
 - 10) Eph 1: 11 W. Bauer: Wörterbuch zum Neuen Testament S. 805.
 - 11) Jo において〈派遣〉と結びついて用いられている。3: 35, 5: 36, 6: 37, 39.
 - 12) Kittel: Theological Dictionary of the New Testament VI pp. 721 ff.
 - 13) W. Bauer: Wörterbuch zum Neuen Testament S. 826.
 - 14) カルヴァン: 新約聖書註解, ガラテヤ・エペソ 1962, 森井真訳, 220頁。では〈回復〉〈確立〉と訳されている。
 - 15) Strack-Billerbeck III S. 160 ff IV S. 559 ff.
 - 16) Kol. 1: 25 〈わたしは神の言を告げひろめる務をあなたがたのために神から与えられているが、その為に教会に奉仕する者となっているのである。Heb 1: 14 〈救いを受け継ぐべき人々に奉仕するため、御使いたちは、すべて仕える霊である。〉
 - 17) Rm 15: 31, I Kor 16: 15, II Kor 6: 3, 8: 4, 9: 1, 13, 11: 4.
 - 18) Apg. 1: 17 ff 12: 25, 20: 24, 21: 19 H. Conzelmann: Die Mitte der Zeit 1962⁴ 邦訳, 363頁, 註 2 .
 - 19) E. Schweizer: Gemeinde und Gemeindeordnung im Neuen Testament 1962, 邦訳, 269頁。
 - 20) J. A. T. Robinson: The Body A Study in Pauline Theology 1952, 邦訳, 9頁, 88頁。
 - 21) R. Bultmann: Theologie des Neuen Testamen 1958⁴ S. 182 f S. 298 E. Käsemann: Christus und die Kirche in dem Epheserbrief. 1930 S. 74 f.
 - 22) 岡村民子: 聖書における人間の主体性, 1969, 130頁。
 - 23) O. Cullmann: Urchristentum und Gottesdienst 1950, S. 28, 日本聖書協会訳 1955 では〈教会の徳を高める〉ということであって決して第1義的に、個人の道徳性にふれているのではない。
 - 24) cf. 岡村民子: ibid 124頁。
 - 25) Kittel: ibid IV p. 625.
 - 26) W. Busset: Kyrios Christus 1965⁵ S. 197 註 1 .

27) W. Schmithals: Paulus und die Gnostiker S. 71.

私(光の王の子)は長い間
辛抱してこの世界に住んでいた
私のはかりが充ちるまで
私のはかりが充ちて、私の教が充ちたとき、
私の助け手が来り訪れた。
彼は私を彼等のもとからつれ去り、
私を高め、全きものの家に私を居らしめた (Ginza 463, 13 ff)
真実で信仰のあつい全き者は幸である。
その人は汝を知り、汝を見たのだから。
彼らは戦に勝って昇天し、
光の住居を見る。(ibid 14, 19 f)

以上中川秀恭：ヘブル書研究 1957年 130-131 頁より引用。

28) Kittel: ibid I p. 363.

29) O. Michel: Per Brief an die Hebräer 1955 S. 143 f

30) H. Schlier: Der Brief an die Galater 1961 S. 188. R. Bultmann: ibid S. 564.

31) (I Kor 2 : 6 Heb. 5 : 14. P. Tillich: Des Widestreit von Raum und Zeit Gesammelte Werke VI 1963 邦訳、〈キリストと歴史〉180頁 テレイオスは人間のもろもろの可能性によって計られず、歴史の中に存在するキリストの充実によって計られる。) (野村順子訳)

32) Kittel: ibid II pp. 942-3 W. Bauer: ibid S. 682 1. C. d.

33) E. Lohmeyes: Die Briefe an die Philipper Kolosser und Philemon 1964 S. 65 註 4.

34) 荒井猷：原始キリスト教とグノーシス主義 1961 145-155頁 特に 151頁。

35) Jo 1 : 14, 16.

36) Kittel: ibid IV p. 633 (Deissner). D. Bonhöffer はこれを〈ついにキリストの成人の基準に至る〉(大宮薄訳)としている 〈聖徒の交わり〉1963 邦訳 212 頁。

37) R. Bultmann: ibid S. 279. 更に〈成人する〉ことは、〈小児性〉からの脱却であるが、〈神の子〉であることの放棄ではない。F. Gogarten: Verhängnis und Hoffnung der Neuzeit 1953 S. 74.

The Sickness unto Death
—Christian Understanding of Life and Death of Man—

Minoru AKITA

1. Kierkegaard's "Sickness unto Death".
 - a) The subjects which he brings out.
 - b) The meaning of 'Despair'.
 - c) The problem of life and death and the problem of sin in man himself.
2. Kierkegaard's God and Biblical God.
 - a) Kierkegaard's existential understanding of God and man.
 - b) Kierkegaard's understanding of life and death and the Biblical.
3. Biblical understanding of life and death 1.
 - a) Historical and climatic background of Biblical understanding.
 - b) 'Sin' and 'life and death' in Gen. 3.
4. Biblical understanding of life and death 2.
 - a) The Gospels' understanding of this problem.
 - b) Death and resurrection of Jesus and his disciples.
 - c) The new life in Jesus' disciples.
 - d) The problem of simultaneity (coexistence) of Jesus and us.
5. Conclusion
 - 'Life and death' and 'the eternal life'.

Die Entstehung des Begriffes *ἀγνος* in dem Urchristentum

Yukimaro AMAGAI

Die Entstehung des Urchristentum erweist sich die theologische Bewegung. Die Bewegung ist die Ent-zentralisierung der urchristlichen Gemeinde an Jerusalem. Die Gemeinde in Kleinasien wieder-interpretiert die christlichen Überlieferung. Es bedarf das neue hermeneutischen Kriterium. Wir finden sich dieses hermeneutischen Kriterium an dem Begriff *ἀγνος*. In Verlauf der Zeit AT→Pls.→Epheserbrief erweist sich die Verweltlichung oder Säkularisierung der christlichen Überlieferung unter inneren gnostischen Denkweise.